

座長のまとめ

研究発表会および分科会の座長をつとめて

山 田 千佳子

(独立行政法人国立病院機構金沢医療センター附属金沢看護学校)

第20回石川看護研究会学術集会におきまして午前は第1群、午後は分科会1の座長をつとめさせて頂きました。また学術集会としては最後という年にこのような役割を担当させて頂いたことを光栄に思います。第1群は事例研究に関するもの4題の発表で、いずれも臨床ではよく遭遇しますが、解決がなかなか困難な問題に対しての取り組みで、良い結果が得られた報告でした。

第1席 金沢赤十字病院の金子久美子さんの発表は、家族に自分の病状や思いを伝えることができない終末期患者とその家族に対し渡辺式家族アセスメントモデルを使用し、家族成員一人ひとりの問題を明確にし関わった。その結果家族のもっている力を発揮し、残された時間を有意義に過ごすことができたという報告でした。

終末期の患者を支えるには家族の安定や支援が重要であり、看護師が患者とその家族へ介入することの重要性を示唆されていました。

第2席 国民健康保険志雄病院の中村春枝さんの発表は、消化管術後に発生する病的腸痙からの排泄物により著しい皮膚障害を起こした患者の腸痙ケアについての研究でした。腸痙ケアの困難性が高いためWOC認定看護師にコンサルテーションした上で、そのコンピテンシーを分析し、看護師がその分析内容を自分たちの技術と比較し改善することで腸痙ケアを達成に導くことができた。また一緒に参加した患者自身のケア能力を高めることにも有効であった。病的腸痙で苦しんでいる患者を何とかしたいという研究者の熱意が伝わってくる報告でした。今後益々エキスパートナースのコンピテンシーを臨床で活用する必然性が高まっていると思います。今回の研究を生かし、志雄病院でエキスパートと認められている看護師のコンピテンシーを分析し、病院全体の看護師の質の向上を図る研究なども興味深いのではないかと思いました。

第3席 国立病院機構金沢医療センターの西美穂子さんの発表は、慢性呼吸不全の増悪を繰り返し人工呼吸器離脱困難な状況にあった患者に、リラクセーションを取り入れ補助呼吸筋の緊張緩和

に努めた。その結果ウィニングできADLが改善し、QOLも向上したという研究でした。リラクセーション導入に伴い、身体的効果のみならず、心理的な関わりもはかれていた。また患者も参加することで日常生活における目標が明確となりそれを達成することで自信につながっていたと報告されていました。

第4席 金沢医科大学病院脳脊髄神経センターの境田優子さんの発表は、誤嚥する危険性の高い高齢者の経口摂取の是非についての研究でした。医療者と家族の思いの対立が見られた事例について、病棟カンファレンスで患者・家族の希望を第一に考え安全に経口摂取するための援助を検討し実施した。その結果、誤嚥せず摂取でき意識レベルの改善にもつながり、患者・家族共に満足が得られたという報告でした。

リスクを優先に考えた援助により、かえって患者の生命力の幅を小さくすることが、再認識されました。また、フロアから家族を交えたカンファレンスも効果的という助言をいただきました。

午後の分科会1では「事例検討に関するもの」というテーマで石川県立看護大学助教授川島先生を講師にお迎えし、前半は単なる事例報告で終わらないために、事例報告と事例研究について「看護の基本形、健康な人間の状態、どのような研究疑問を持つかによって研究対象の素材化が異なる、事例研究の構造、事例研究にするための方法（データの素材化、分析方法）」の内容でお話して頂きました。また第1席金子さん、第3席西さんおよびフロアから、研究を進める上での困難性や疑問を出してもらい話し合いました。後半は、一事例毎に構造図を用いて重要ポイントを解説しながら、研究に対する熱のこもった講評をして頂きました。

先生にお話頂いた中から、今後日々の看護の実践において、また事例研究を進めていく課題として、以下のことが強く印象に残りました。「対象を看護的視点で見ると見つけ方を磨く。事実を丁寧にひらう、丁寧な分析、事実の素材化が重要。看護介入によって起こった対象の変化と事実の明確

化。変化の意味がきちんとわかることの重要性。患者が自分の体の中に起っていることを患者自身が描けるように支援すること。」などです。また、当日は多数の看護学生の参加もあり、石川県

の看護を担っていく人たちの良い刺激になり、今後に期待がもてるところです。最後に、川島先生、発表者の皆様、会場の皆様方、係りの方々に心より感謝申し上げます。

研究発表座長をつとめて

石 川 倫 子

(独立行政法人国立病院機構金沢医療センター)

第20回石川看護研究学術集会におきまして研究発表座長をつとめさせていただきました。今回は4題の発表でしたが幅広い分野からの発表で、いずれも現場での問題に率直に取り組んだものでした。また午後からの分科会においても、この4つの演題を元に臨床における看護研究を進める上で陥りやすい問題点や困難に思う点などを金沢大学医学部保健学科助教授須釜淳子先生を講師に議論し、さらに臨床における研究の方法を深めることができました。

第1席、金沢大学医学部保健学科の森田瞳さんの発表では、皮膚洗浄という看護の基本的なケアによって患者の掻痒感が軽減したという内容を患者の言動のみならず、皮膚の生理学的な所見をふまえ、科学的な観点から今回のケア方法の有効性を評価した研究でした。1症例の報告ではありましたが有効なケア方法であるといえ、参加者にとって皮膚のよりよい清潔ケア方法の情報提供にもなりました。

第2席、山中温泉医療センターの児玉三佐子さんの発表では、昨年に引き続き褥創対策チームの活動の評価について報告されました。自分たちの活動を評価し、次の対策を考え、取り組まれていることはとても素晴らしいことであり、臨床において重要なことであると思います。今回は体圧分散寝具に切替型マットレスを整備した結果、褥創発生率は変化しなかったが、仙骨部の褥創が有意に減少したということでした。質疑応答は分科会にて活発に行われ、事実のデーターの読みとりや分析方法、このような研究での倫理的配慮はどのように行かなど議論され、学びの多い研究でした。

第3席、金沢大学医学部附属病院の和田五月さんの発表では、臨床に活用できる筋肉注射・皮下注射施行時の疼痛緩和方法を医学中央雑誌（Web版）にて過去10年間の文献を検索（15630編）し、看護者が行える注射時の疼痛緩和 방법으로有効性が明らかな原著論文の6編を対象とし、臨床で活用するために菱沼が述べている5つの視点から文献検討した研究でした。質疑応答では文献検索を1992～2003年にした根拠など聞かれ、研究目的から文献検索のキーワードの焦点の絞り方など議論されました。また文献研究において臨床では苦手意識から海外文献の翻訳ができない現状がありますが、今後努力していかなければいけないと痛感しました。

第4席、国立病院機構石川病院の山本佳江さんの発表では、車椅子安全ベルト廃止への取り組みとして車椅子姿勢保持について見当された研究でした。身体拘束は高齢者の生活の質に直接影響することだり、廃止に向けた本研究は患者本位の非常に価値のある看護介入の試みであり、大変意義のある研究であると感じています。

最後になりましたが、研究に取り組まれた皆様には本当にご苦労さまでした。今回は発表のみでなく、分科会でも活発なご意見を述べていただきありがとうございました。今後のご活躍を心よりお祈りしております。また座長として、与えられた貴重な時間を会場からの質疑応答などで十分に活用できず反省しております。今回の貴重な経験をもとに今後の私自身のステップアップに繋げていきたいと思っております。ありがとうございました。